

ダンスは無限

豊橋アーティスト・イン・レジデンス 2024-2025

ダンス・レジデンス

Dance Residence

小尻健太〈SandD〉

大森瑠子

モテギミユ

鈴木ユキオプロジェクト

竹内梓

ランニングマシン

はらだまほ



穂の国とよはし芸術劇場PLAT / 豊橋市

大森瑠子 成果発表会
『Tuonelan (トゥオネラ)』
プレショーイングより

とよはしに 色とりどりの ダンスが咲き誇る

穂の国とよはし芸術劇場PLATが主催する豊橋アーティスト・イン・レジデンス〈ダンス・レジデンス〉は、主にダンスや身体表現に取り組むアーティストを豊橋に迎え、滞在制作を支援する事業です。公募等を通じて選出されたアーティストは一定期間PLATを拠点に創作を行う一方、PLATは設備や宿泊場所を提供するだけでなく、技術協力やリサーチのための人・施設・ロケーションのコーディネートなど、様々な形で作品づくりをバックアップします。対するアーティストもワークショップや豊橋市内でのリサーチ、稽古場公開などを実施。市民や地域との交流を図り、文化芸術の普及に貢献します。

2024・2025年度はこれまでも増して多彩なアーティストが参加。無限のスタイルが提示され、子どもから大人までがダンスの幅広さや奥深さに触れることができました。また2025年度はダンス・レジデンスから発展した新事業も実現。この街に根づいたダンスの芽は確実に花開いています。今や世界の大都市に優るとも劣らぬ多種多様なダンスを豊橋で体験できることは大きな誇りです。

豊かな自然や温暖な気候が生んだ名産、懐かしさと新しさが共存するような街並み、大切に受け継いできた伝統行事など誇れるものはたくさんありますが、豊橋はアート分野でも満たされています。本誌ではダンス・レジデンス2024・2025の充実の成果を報告します。



Toyohashi



←「ランニングマシン」ダンスワークショップの様子
→はらだまほ 0歳～24ヶ月対象 およこでたのしみおどりのワークショップの様子
↓小尻健太 (SandD)
『Engawa, The Self in Season』
横浜公演より
Photo: momoko japan



ダンス・レジデンスの進化&深化によって 豊橋で新作ダンスの世界初演が実現!

2025年度は、過去にダンス・レジデンス参加経験のあるアーティストとPLATの共同制作が実現。小尻健太のカンパニー〈SandD〉が豊橋で新作『Engawa, The Self in Season』の世界初演を行いました。ドイツの建築家ハネス・マイヤーをセノグラフィー（舞台美術）に迎え、国際色豊かな編成で取り組んだ新作はどのような舞台になったのか。企画の経緯から創作のプロセス、本番の様子などを特別レポートとしてお届けします。

小尻健太（SandD）は2022年度と2023年度の2度にわたってダンス・レジデンスに参加しています。小尻個人では2013年、新国立劇場製作のダンス作品の出演者としてPLATに登場していましたが、ダンス・レジデンスを通じて当劇場との距離が縮まったのは間違いありません。

おりしもPLATは2024年度からアーティストや劇団、ダンスカンパニーとの新作共同制作事業を開始しました。目的は地方都市の劇場から全国、ひいては世界に向けて作品を発信するためです。そこで2年目のアーティストとして国内外での経験豊富な小尻が候補に挙がりました。横浜赤レンガ倉庫1号館振付家に就任して間もなかった小尻からは、豊橋と横浜の2都市で新作を上演したいという提案があり、PLATにとっても願いの形での企画を始動させることができたのです。

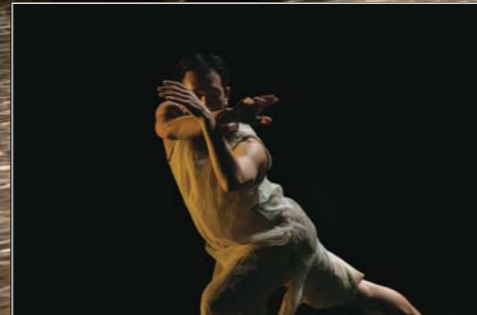
『Engawa, The Self in Season』はハネス・マイヤーが参加したことで国際共同制作の側面も持ち併せ、PLATにとって良い経験となりました。彼の手掛けた舞台美術はシーンごとに変化するのが特徴でしたが、かなりの重量があり、スタッフが操作するのも大仕事！ハネスとは常にコミュニケーションをとり、彼の細かく徹底した指示にも応えながら実験を繰り返し、本番に向けて調整を図りました。11月18日～30日の滞在期間中、稽古場である創造活動室Aでのクリエイションが下支えする環境を整えつつ、ダンサーもスタッフも公演会場となるアトスペースで本番をイメージしながら準備。特に舞台美術操作スタッフをはじめとする技術者は効率よく作業を進められました。ちなみに、小尻とハネスが出会ったのは国際芸術祭「あいち2022」。その時「縁側」について共通するイメージを持っていることを知り、意気投合したことから、屋内と屋外の間（あわい）と言える縁側をコンセプトにした『Engawa』シリーズが始まったので、愛知県とは運命的なご縁があるのかもしれない。

11月29日・30日の公演本番。小尻が四季の移ろいや「第五の季節」を意識していたとおり、雰囲気異なるシーンが見え方を変えていく舞台美術とも相まってレイヤーのように現れます。振付演出に心血を注ぎながら小尻自身の見せ場もしっかりあり、観客もまさに「縁側」にいるような心地よい空気を受け止めました。今回は公演地が豊橋と横浜のみのため、遠方からの来場があったのもうれしい出来事。今後、再演の機会があれば豊橋をまた広くPRできる可能性にもつながります。日本のダンスシーンの実情を踏まえると、小尻にとって大規模で挑戦的な公演でしたが、アーティストやカンパニーと劇場が一歩踏み込んだ協力関係を築けたのは何よりの成果です。

「PLATに来て、作品を上演して、終わり」ではない関係性をアーティストと結ぶことができれば、市民向けワークショップなどの提案もグッとしやすくなります。半面、作品の再演や国内外でのプロモーションといった次につなげられる活動を模索することは劇場の課題です。『PLATダンス・レジデンス作品集』（2022年）、康本雅子『全自動煩悩ずいずい図』（2023年）に続き、ダンス・レジデンスから発展して生まれたプログラムも小尻の公演で3度目。PLATではこれからも身体を軸としたダンス・レジデンスの可能性を追求していきます。



小尻健太(SandD)
『Engawa, The Self in Season』
横浜公演より
Photo: momoko japan



小尻健太
Photo: momoko japan



滞在制作ではダンスのリハーサルはもちろん、舞台美術を動かすテクニカルリハーサルも入念に行われました。



セノグラフィー（舞台美術）のハネス・マイヤーを囲んで

小尻健太

Kenta Kojiri

2022・2023

ダンサー・振付家。1999年ローザンヌ国際バレエコンクールにてプロ・スカラシップ賞受賞。モナコ公国モンテカルロバレエ団、ネザールランド・ダンス・シアターに在籍し、イリ・キリアンなど世界的な現代振付家の作品に出演。2010年よりフリーランスとして国内外で活動。17年より〈SandD〉を始動し、ジャンルや世代を横断した舞台芸術におけるダンサーの身体の在り方を探求している。近年は、ミュージカル『エリザベト』振付、舞台『千と千尋の神隠し』（カオナシ）出演、フィギュアスケート日本代表選手の表現指導、横浜赤レンガ倉庫1号館振付家を務めるなど、多岐にわたる活動を展開。

※「ダンス・レジデンス」2022・2023レジデンスアーティスト。

Data

プラット・レジデンス事業 新作共同制作

小尻健太〈SandD〉

『Engawa, The Self in Season』

2025年11月29日・30日 PLATアトスペース

振付演出・コンセプト：小尻健太

セノグラフィー・コンセプト：ハネス・マイヤー

出演：鳴海令那、佐藤琢哉、堀田千晶、島中真濃、青柳潤、小尻健太



唯一無二の表現で群舞を創作&発表

クラシックとストリートを土台にした

大森瑤子 2024 Yoko Omori

ヨコハマダンスコレクション2023で「若手振付家のための在日フランス大使館賞」と「穂の国とよはし芸術劇場PLAT賞」をW受賞。これを機にダンス・レジデンス2023に参加した大森瑤子が2024年度、再び豊橋で滞在制作を行いました。今回は日本女子体育大学時代からの仲間5人で10日間滞在。ソロの多い大森が群舞の作品に挑み、上演とほぼ同様のプレショーイング（成果発表会）まで完走しました。彼女のレパトリー（転換点）にPLATが役立てたのは喜ばしい成果です。新作『Tuonelan（トゥオネラ）』はJCDN主催「Choreographers 2024」新潟公演で初演。その後、イタリア滞り制作で磨きをかけ、本国でも好評を得ることができた大森は、これらの成果により第20回日本ダンスフォーラム賞を受賞しました。ダンス・レジデンスで創作された作品が他の都市で上演され、海外にも進出するのは理想的な流れ。作品やアーティストが各地に羽ばたくことで豊橋やPLATの名も知れわたる可能性が高まります。



人間環境大学附属岡崎高校でのワークショップの様子



成果発表会『Tuonelan（トゥオネラ）』プレショーイングより

一方、大森は地域への還元も忘れていません。彼女は滞在中、人間環境大学附属岡崎高校を訪問。ダンス部に振付を行い、一緒に踊りました。クラシックバレエとストリートダンス、対照的な踊りを経験してきた大森の振付は高校生にとって親しみやすくもあり新鮮でもあったようで、ワークショップは大反響。プロと踊る貴重な体験もできました。対して大森も高校生の純粋さと情熱には大いに刺激を受けていました。なお、豊橋市内でのアウトリーチは実施できませんでしたが、PLATの市民対象企画には市外からの応募が一定数あるのも事実。PLATは三河地域の中核劇場として近隣の受け皿ともなり、広く文化芸術振興に貢献しています。大森のダンスにはクラシックバレエの技術とストリートダンスのポップさ両面があり、今までにない表現として高く評価されています。さらに魅力的なのは人間の悲哀が感じられるところ。大森がPLATでパフォーマンスを披露した際、普段ダンスを見ることがないお客様から「思わず涙がこぼれた」との感想をいただきました。ダンスは鑑賞が難しいと思われたり、ジャンルごとに観客が分断していたりしますが、人間の本质をとらえる大森には今後もその架け橋となるのが期待されます。

あなたを私に 投影してみたら……

モテギミュ 2024 Miyu Motegi

アイデンティティとゲシュタルトを近年の主題に掲げるモテギミュは、自己と他者について探りました。例えば、名前を誰かに貸したら、名前を奪われたらどう感じるか。身体同士が接近する時、人はどこまで許容し、どこから拒否を示すのか。モテギの思考は一見観念的ですが、生身の人間が集まってリサーチするところに身体性があり、滞在制作の醍醐味もありました。ワークショップ「散歩のからだ」では参加者がペアを組み、ひもの端と端を握って水上ビルや豊橋市まちなか図書館にお出掛け。二つの身体でありながら一つの存在とも見立てられる実験に市民を巻き込んでいきました。成果発表シェアリングでも来場者の参加姿勢や双方向性を重視。モテギの問いかけに応じる来場者たちは、知らず知らずのうちに彼女の表現に加担していることにもなり、市民の生きた反応を吸い上げるモテギに恐怖すら覚えて…!?

（個）を溶解させるようなアプローチはダンス・身体表現の未知の可能性を浮かび上げ、来場者も奇妙な体験に興奮しました。



ワークショップ「散歩のからだ」の様子



稽古場風景



ワークショップ「散歩のからだ」の様子

社会を見つめ、 活動をアップデート

鈴木ユキオプロジェクト 2025 Yukio Suzuki Projects

鈴木ユキオプロジェクトはダンス・レジデンス初年度である2017年に滞在経験あり。今回は新たな試みの提案があり、2度目の参加が実現しました。彼らは滞在制作で新作「あなたは静かなのがすき」のためのリハーサルを行い、滞在直後の週末、主催公演として上演しました。それは日本の創作環境の実態に対する挑戦でもありました。舞台芸術の多くは東京で制作、初演されます。しかし鈴木は地方都市の可能性を信じ、豊橋で新作の世界初演を行いました。この公演にはPLATの技術スタッフも協力。普段は稽古場である創造活動室をそのまま公演会場とすることで創作や演出の効果がさらに深まり、アーティストと劇場の双方に収穫がありました。鈴木はベテランの域にありますが、若手ダンサーを積極的に起用しています。また障がい者との協働にも意欲的で、常に社会や地域、人に目を向けて自身の感覚

をアップデートさせています。そういう眼差しをもった鈴木だけにワークショップも大好評。多くのワークショップ参加者が新作を鑑賞してくれたことも成果の表れでした。



ワークショップ「カラダと対話するところから生まれるダンス」の様子



新作「あなたは静かなのがすき」稽古場風景



ワークショップ「カラダと対話するところから生まれるダンス」の様子

感覚の共有

巨大な氷が引き起こす

竹内梓 2025

Azusa Takeuchi

竹内梓は拠点であるフランスでの新作『FURERU／触れる』上演を目的に、日本人アーティストとのクリエイションを行いました。そこでダンサーの身体と同じくらい存在感を放ったのが巨大な氷！彼女はマテリアル(物質)との実験を通して他者との身体的な共感を探りました。数十キロある氷に触れる時、鑑賞者はどんな感覚をもよおすのか。この文章を読むだけでもヒヤリとませんか？ 竹内は氷で派手な演出をしたいわけではなく、鑑賞者が演者と感覚を共有すること＝身体の拡張を試みたのです。そのため滞在メンバーの照明家・高田政義も氷が〈映え〉過ぎないように照明を試行錯誤。ヒトとモノとの対峙に美術的なアプローチも感じられました。また音楽家の山口晋似郎は上演中に流す会話や生活音に加え、環境音を市内各所で採取。国の天然記念物に指定されている葦毛湿原にも赴き、豊橋らしい音づくりに奔走していました。



稲古場風景



稲古場風景



竹内梓 成果発表会より

多様性を体験

はじける笑顔で

ランニングマシン 2025

Running Machine

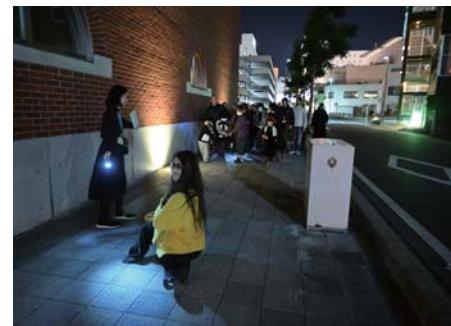
2025年度は海外からの受け入れを再開。日本とオーストラリア、拠点の異なるアーティストで構成された『ランニングマシン』クリエイションチームが参加しました。彼らは2022年作品の日本ツアーを目指し、アクセシビリティの調査を実施。メンバーの檜皮一彦は車いすユーザーのアーティストなのでアクセシビリティは身近な問題であり、PLATでも日々取り組んでいるだけに、双方に有意義な機会となりました。このチームにはダンサー以外に映像・メディアアーティストや照明家もいますが、全員パフォーマーにもなるのが特徴。演者と裏方の垣根のなさは新鮮でした。ワークショップには多くの小学生も参加しましたが、彼らの持つ空気とともに、障がいの有無や国籍を問わず共生する社会を体験できたはず。実際、子どもたちは自分の身体が映像上で裁断・編集される実験に大盛り上がり。さらに成果発表会では檜皮の車いすを来場者が担ぎ、PLAT敷地内を練り歩くという幕開けに一同仰天！参加型・回遊型の趣向に子どもも大人も夢中になり、舞台芸術の多様性も実感できました。



『ランニングマシン』パフォーマンス&トークより



ダンスワークショップの様子



『ランニングマシン』パフォーマンス&トークより

豊かな未来を

あらゆる子どもたちに

はらだまほ 2025

Maho Harada

海外研修の経験があるはらだまほは、ヨーロッパの子ども向け舞台芸術祭には必ずスペシャルニーズの子ども(様々な理由で特別な支援や配慮が必要な子ども)のためのプログラムがあると知り、その道を模索します。しかし、個人で学校や施設にアプローチするのは難しかったため、ダンス・レジデンスに参加。豊橋市役所が仲介し、ダンサーや制作、児童指導員からなるチームで、児童発達支援センター・高山学園への訪問を実現させます。3日間のリサーチは見学主体で慎重に行われましたが、最終日に思いがけない出来事も…。はらだまが園庭で踊っていると、一人の男の子が真似をします。やがて彼は独自の振付を見せ、もはや二人のダンスバトル!? さらに他の児童も加わり、言葉によらない交流が展開されたのです。PLATでは赤ちゃんと保護者を対象にしたワークショップも月齢を分けて実施。滞在制作の締めには福祉関係者を含む市民を迎えて公開ミーティングを開催しました。福祉とアートはどう関われるか。答えを求めず意見を付箋に書き合ひ、それにまた意見を重ねていくことで可能性を探りました。



豊橋市立高山学園でのリサーチの様子



0歳~24ヶ月対象 おやこでたのしむおどりのワークショップ「からだのこぼれおしゃべりしよう」の様子



公開ミーティングの様子

Voice

市民の声
(アンケートより一部抜粋)

久しぶりに身体を大きく動かした。腕だけでなく、身体の中をつながる身体が動きとして美しく動いていて気持ちいいと感じた
(鈴木ユキオワークショップ参加者・40代)

実施データ

2024年度
参加アーティスト
大森瑶子
モチギミユ

アーティスト滞在日数: 24日
イベント開催日数: 4日
レジデンスアーティストおよび滞在メンバー人数: 8人
ワークショップの参加者数: 19人
成果発表会の参加者数: 35人
参加者合計: 54人

2025年度
参加アーティスト
鈴木ユキオプロジェクト
竹内梓
ランニングマシン
はらだまほ

アーティスト滞在日数: 40日
イベント開催日数: 8日
レジデンスアーティストおよび滞在メンバー人数: 24人
ワークショップの参加者数: 59人
成果発表会の参加者数: 65人
参加者合計: 124人

あっという間の時間でした。ダンサーみんながすごかったです。よーこさんの作品大好きです。新しいボレロを見た感じで感動!! 来てよかった。これからも応援してます

(大森瑶子成果発表会参加者・50代)

リサーチの時は、みんなが混ざっていくようでしたが、今回は(モチギさんが)みんなのアイデンティティを吸収して、みんなのものを奪っているような感じで少しこわかったです。奪われた後の人たちは少し中身が減った感じがしました

(モチギミユ成果発表会参加者・20代)

ダンスを作る方法がどうやるのか以前から分からなかったけれど、感触や感情を再現したり、増幅して何かにつなげて動きを作ることには新鮮だった

(竹内梓ワークショップ参加者・40代)



たのしかった。みんなでいっしょけんめい(段ボールを)つんだのに、いっしょんでこわすところとか、とくによかった

(ランニングマシン成果発表会参加者・10歳未満)

普段見ない人、見ない場所で、初めて見る楽器や人々の動き。興味・好奇心の強い息子が、かたまる程のおもしろい刺激を頂き、親としても参加する側としても大満足でした

(はらだまほワークショップ参加者・30代)

Dance Residence Artist Profile 2024-2025

滞在期間中は下記ワークショップのほか、稽古場公開、成果発表会、パフォーマンス、公開ミーティングなど、アーティスト自らの創作手法を活かした地域交流活動を実施しました。

大森瑤子 2024

Yoko Omori



©田村穂乃香

ダンサー・振付家。日本女子体育大学卒業。クラシックバレエやストリートダンスなどを経験。様々なジャンルを交差させるような独自のスタイルで、ソロやグループなどの作品を創作。ヨコハマダンスコレクションにて2019年にコンペティションII最優秀新人賞、2023年にはコンペティションIにて若手振付家のための在日フランス大使館賞・ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ&アーベル賞、穂の国とよはし芸術劇場PLAT賞をダブル受賞。2022年パリDanse élargieにて第2位、2026年第20回日本ダンスフォーラム賞などを受賞。これまで国内外5都市にてグループ作品『Help』、2023年イタリア、フランスにてソロ作品『PLAIN-chan』などを発表。

滞在日程：2024年12月13日～22日 10日間

滞在メンバー：大森瑤子、大内涼歌、尾上実梨、水谷マヤ、八木橋華月

滞在内容：新作『Tuonelan』の創作のため(2025年2月7日・8日「Choreographers 2024」新潟公演にて上演)

●人間環境大学附属岡崎高校ダンス部アウトリーチワークショップ(2024年12月13日)開催

モテギミユ 2024

Miyu Motegi

ダンサー・振付家。6歳よりクラシックバレエを始め、高校卒業後に渡独。バレエ学校にてクラシックバレエとコンテンポラリーダンスを中心に学び、ディプロマを取得後、Budapest Dance Theaterに所属。フリーランスに転向後、2018年に帰国し、東京を拠点に活動を始める。触発をダンスの最小単位と捉え、身体との間に発生する感覚に動きを見出そうとしながら制作を行う。ダンスでしか見出せない、成し得ない身体、身体が主体となりつれ出す動きを目指して踊っている。身体に重ねられた振る舞いや記憶、イメージの露呈に興味をもち、アイデンティティとゲシュタルトがここ数年のテーマになっている。

滞在日程：2024年7月2日～15日 14日間

滞在メンバー：モテギミユ、池田佳穂(キュレーター)、根本しゅん平(リハーサルディレクター)

滞在内容：『Colorful Seaside』(2021)『Blank Pool(hello)』(2022)のモチーフを引き継いだ『BANANA ME』(仮)のクリエイションおよびリサーチ

●モテギミユ ワークショップ「散歩のからだ」(2024年7月13日)開催



鈴木ユキオプロジェクト 2025

Yukio Suzuki Projects



振付家・ダンサー。世界50都市を超える地域で活動を展開し、しなやかで繊細に、かつ空間からはみだすような強靱な身体・ダンスは、多くの観客を魅了している。また、室伏鴻・中村恩恵の作品出演やMV出演、音楽家との共同制作やワークショップなど、活動は多岐に渡る。2008年にトヨタコレオグラフィーアワードで「次代を担う振付家賞(グランプリ)」を受賞。2012年フランス・パリ市立劇場「Danse Elargie」では10組のファイナリストに選ばれた。

滞在日程：2025年9月17日～25日 9日間

滞在メンバー：鈴木ユキオ、安次嶺菜緒、赤木はるか、阿部朱里、堀早央里、加藤理愛、阪田小波、鈴木美奈子、星野梓

滞在内容：新作『あなたは静かなのがすき』の上演に向けたリハーサル(2025年9月27日・28日、PLAT創造活動室Aにて上演)

●鈴木ユキオ ワークショップ「カラダと対話するところから生まれるダンス」(2025年9月20日)開催

竹内梓 2025

Azusa Takeuchi



©Sugawara Kota

ダンサー・振付家。2008年日本大学芸術学部を卒業後、文化庁新進芸術家海外留学制度により渡仏。以降、フランスを拠点に活動。トゥールーズ振付発展センターでの研修プログラム修了後、ダンサーとしてミリアム・グーフィンク、フランク・ヴィグラー、エリーズ・ヴィニユロン、リタ・チオッフィ、ピーピング・トム、平山素子、石川勇太等の振付家の作品に参加。2010年から自身の振付の創作を始め、横浜ダンスコレクションEX2011でMasdanza賞を受賞、2012年トヨタ・コレオグラフィー・アワードファイナリストに選出される。繊細かつ大胆な身体表現により「超感覚的な奇妙さを帯びた美学を展開している」と評されるなど、独特の強度を秘めた世界を創造する。

滞在日程：2025年10月31日～11月10日 11日間

滞在メンバー：竹内梓、橋本玲奈、山口晋似郎、高田政義

滞在内容：新作『FURERU / 触れる』(2027年フランス世界初演)に向けた日本在住アーティストとのクリエイション

●竹内梓 ワークショップ「触れる、触れてみる」(2025年11月1日)開催

益川結子 / ランニングマシン 2025

Yuiko Masukawa / Running Machine

振付家・ダンサー。日本生まれ。オーストラリアを拠点に、クラシックバレエとコンテンポラリーダンスを横断する作品を創作している。オーストラリア・バレエ団が主催する新進振付家賞を受賞し、受賞作《3》の全編版を2025年に初演。Lucy Guerin Inc.のNaarm/Solo Exchange(2025-26)に選出され、インドネシアとオーストラリアにおいて共同制作を展開している。これまでにThe Australian Ballet、Dancehouse、Lucy Guerin Inc.、Arts Houseなどで作品を発表。2025年にはオーストラリア(The Ian Potter Foundation)から研修生として選出され、Trisha Brown Dance Company(ニューヨーク)にて研修を行う。通訳・文化リエゾンとしても東京バレエ団、The Australian Ballet、Terrapin(Asia TOPA)など日豪間の文化交流に携わっている。

滞在日程：2026年1月5日～17日 13日間

滞在メンバー：益川結子、檜皮一彦、植村真、サム・マギルupp、ハリソン・ホール、ジェフリー・ワトソン

滞在内容：2022年オーストラリア初演『ランニングマシン』の2026年日本ツアーを視野に入れたリクリエイションと、日本におけるアクセシビリティのリサーチ

●ランニングマシン ダンスワークショップ(2026年1月10日開催)



©Tiffany Garvie

はらだまほ 2025

Maho Harada



振付家・パフォーマー。「全ての多様な人々におどりの種を蒔く」という目標のもと、2015年より子どものための舞台芸術に取り組んでいる。ベイビーシアター「nido」や3歳以上の子どものための舞台芸術「あっちこっちつつち」、世代別おどりのワークショップ「からだのこぼれおしゃべりしよう」など、多様な活動を展開中。言語と身体の関係性を中心に「おどり」について多面的に思考し、動作から「おどり」になる瞬間や身体が踊り出す瞬間にこだわって作品を紡ぐ。立教大学現代心理学部映像身体学科卒業。おどのま代表。日常の中に、ふと気がつく隣にあるような“おどり”を探している。

滞在日程：2026年2月9日～15日 7日間

滞在メンバー：はらだまほ、鈴木隆司、寺内七瀬、千葉ゆり、川中美樹

滞在内容：スペシャルニーズの子どもたち*に向けた舞台芸術作品創作のための身体リサーチ
*様々な理由で特別な支援や配慮が必要な子どものことを指します。

●0歳～24ヶ月対象 おやこでたのしむおどりのワークショップ「からだのこぼれおしゃべりしよう」(2026年2月10日・12日)開催



はらだまほ 0歳~24ヶ月対象 おやこでたのしむおどりのワークショップ
「からだのこたばでおしゃべりしよう」の様子



まちの未来を拓く一歩

豊橋アーティスト・イン・レジデンス 2024-2025
ダンス・レジデンス 2025年度事業報告書
2026年3月発行

発行：公益財団法人豊橋文化振興財団

主催：公益財団法人豊橋文化振興財団 共催：豊橋市

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会



◀QRコードを読み込むだけで
コンセプトムービーと本誌
データダウンロードサイトへ!

